

SSWANプログラム¹の現状と課題

— 初年度を振り返って —

池田 英喜

(ikeda@isc.niigata-u.ac.jp)

1. はじめに

本稿は、平成 11 年 10 月に私が新潟大学に赴任してから関わった、SSWAN プログラムに関する記録ならびに報告である。担当者である私個人の情報として、あるいは範囲を少し広めて新潟大学留学生センターの情報として収めていたのでは、このプログラムの将来にとって、また同じように他大学で実施されている(されようとしている)短期留学プログラム(以下短プロ)の将来にとってあまり有意義なことではなかろうと思い、このキーを叩いていることをご理解願いたい。事実ここにこれから述べる問題の多くはすでに他大学実施の短プロでも発生していたことを最初に断っておく。

2. 学生について

2001 年 4 月から 2002 年 1 月末現在での短プロ来日学生は 6 人おり、その内訳は以下のとおりである。

国	人数	部局	奨学金の有無	来日時期	備考
ドイツ	1	工学部	なし	4 月期	
	1	法学部	あり	4 月期	
イギリス	1	法学部	あり	10 月期	
韓国	2	工学部	なし	4 月期	
オーストラリア	1	工学部	あり	10 月期	半年コース

なお、本稿執筆時には 10 月期からの授業の成績がすべて出そろっていないので、プログラムの修了要件を満たしているかどうかは不明である。

2. 1. ドイツ人学生の場合

工学部 A くん: 来日直後から、自分の希望するような専門科目がないことを訴えていた。日本語に関しては、いわゆる Intensive ではない初級クラスの受講希望があり、そちらで週に 2 コマの授業を受けていた。こちらで取った(あるいは取ろうとしている)単位がドイツでカウントしてもらえるかどうかをかなり気にしており、工学部の専門の先生には何度もドイツとやり取りをしていただいたようである。

- ・ 単位互換の問題
- ・ 希望する授業の有無の問題

法学部 B くん: 半年間は大学院入学前予備教育の学生と一緒に日本語等研修コースで、日本語を集中的に勉強し、その傍らで法学部の専門の授業にも参加していた。日本語等研修コースの結果は悪く、

¹ Short-term Study and Work-experience At Niigata University の略で、規則上の正式名称は、新潟大学短期留学プログラム

他の授業を受けさせていたほうが良かったと思われる。研修コースの受講は本人と法学部双方の希望によるものであったと記憶しているが、実情は他に魅力的な授業が4月期には提供されていなかったからのようである。また、インターンシップ科目がない²ので、仕方なく自分でアルバイトをしたところで就労証明書を発行してもらい、それを私のところに持参して単位にできないかと訴えてきた。

- ・ 希望する授業の有無の問題
- ・ プログラムに関する虚偽情報の問題
- ・ 日本語の授業選択の問題

2. 2. イギリス人学生の場合

法学部 C くん: 半年間は大学院入学前予備教育の学生と一緒に日本語等研修コースで、日本語を集中的に勉強し、その傍らで法学部の専門の授業にも参加している。研修コースの受講は本人と法学部双方の希望によるものであり、なおかつホームステイをしていることもあって、ゼロビギナー³であったにもかかわらず日本語力は飛躍的に伸び、簡単な日常会話なら問題なくこなせる程度にまで学習が進んでいる。研修コース中ということもあって、今のところ法学部以外の短プロ授業には出ていない。

- ・ 授業負担過多の問題

2. 3. 韓国人学生の場合

工学部 D くん、E くん: この2名はどちらかという英語より日本語のほうが得意で、来日当初から私とのやり取りは日本語と英語を混ぜてのものであった。二人とも、かなりの数の、しかも短プロ科目以外の専門科目を日本人に混じって受講し単位を取得した。本人達は新潟での単位を韓国に持ち帰り、卒業必修単位に組み込んでもらうことを前提に来日しているので、非常に熱心であったという報告を授業担当の教員から受けている。英語で実施している短プロ科目受講中にわからないところが出てきたときには日本語で質問していたらしい。ただ、新潟大学で取得した単位が韓国ではどの科目の単位として認定してもらえるか、あるいはしてもらえないのかは、成績証明書と共に授業シラバスを本国の大学に提出してから、始めてその審議がスタートするので、本人達は非常に不安がっている。とくにD君の場合は4年生なので、単位が認められないことは同時に帰国後の留年を意味する。

- ・ 単位互換の問題
- ・ 英語力不足の問題

2. 4. オーストラリア人学生の場合

工学部 F くん: 今までの短プロ学生の中で唯一の半年コースの学生であると同時に、唯一の英語ネイティブである。来日以前から工学部の指導教員が非常に熱心で、私のほうに短プロに関する情報提供を求められ、またこちらもメールでのやり取りを見せていただいていたので、事前準備が非常に容易であった。短プロ授業科目のシラバス等の情報も来日前に留学生センターの短プロ専用のWEBページ⁴で確認をしていたようで、とくに不安はなかったようである。強いて言えば、どの授業がどこで行われているかがわかり

² このプログラムの名前にもあるとおり Work-experience (日本の大学用語を使うとインターンシップ) をカウントするというのが、ある種の売りであるにもかかわらず、Work-experience という科目は実際には提供されていないし、学生が自分でいわゆるアルバイトをしてその証明書を事業所から発行してもらっても、単位として認定されるかどうか分からない。おそらく現状では認定されないだろう。

³ これより以前に日本語学習歴のない者をこのような名で呼んでいる。

⁴ 留学生センターHP: <http://www.isc.niigata-u.ac.jp/index.html>
短プロ専用 HP: <http://www.isc.niigata-u.ac.jp/sswan/sswanHP/sswan.html>

にくかったようで、学内施設についての詳しいオリエンテーションが必要であると感じた。

- ・ 学内施設についてのオリエンテーションの問題

2. 5. 問題の整理

出てきた問題を今一度整理すると以下のとおりである。

- ア) 単位互換の問題
- イ) 希望する授業の有無の問題
- ウ) プログラムに関する虚偽情報の問題
- エ) 日本語の授業選択の問題
- オ) 授業負担過多の問題
- カ) 英語力不足の問題
- キ) 学内施設についてのオリエンテーションの問題

次節では、上の問題それぞれについてどのように解決してゆくべきかを検討する。

3. 問題の解決にむけて

この第3節では2節で整理した問題を新潟大学ではいかにして解決していくべきかを探る。

3. 1. 単位互換の問題

単位の互換に関しては毎年提供できる科目とその担当者が固定されていて、なおかつほぼ同じ内容で講義がなされるならシラバスのすり合わせ等を、協定校との間で学生の来日前にも事前に行うことができるが、来年度の授業科目とその担当者が最終的に決定されるのは年度の始まりが近づいてからというのが現状ではなかろうか。ただこれは事を教員側の視点で見ている典型例であって、実際に授業を受ける学生は、どの授業を受ければ本国でどの授業の単位に相当するかは、できる限り早く(できれば来日前に)知りたい情報であろう。シラバスが出そろった時点で、来日学生の本国での所属大学の担当者へ、シラバス一覧を早急に送付しておけば、かなり早い段階で、新潟大学でのどの科目が本国でのどの科目に相当するかがはっきりするだろう。ただそのためにはすべてのシラバスが英語化されていなければならない、英語が不得手の教員が多い中で、誰がその作業を担当するのかが、さらに問題となってくる。しかしながら、センター提供のいわゆる短プロ科目については英語になっているので、14年度はこれをすべて留学生センターHPのSSWANのところに、コンピューター端末からダウンロード可能なPDFファイル形式でアップロードする予定である。

3. 2. 希望する授業の有無の問題

これは本プログラムの開始事情と大きく関係している。そもそも、短プロはすでに多くの国立大学で実施されているので、新潟大学でもこれがないと、国立大学として留学生政策で遅れをとっているように見られるという危機感から始まったような感がある。よって、学生のニーズを調査することもなく、英語で授業が提供できるかどうかだけに注意が払われていた。短プロ実施初年度が終わろうとしている今、実際にプログラムに参加した彼ら学生に、どんな授業が欲しかったのかを確認しておく必要がある。できる限り内容的に魅力のあるものを提供するための努力を怠っては、こういった短期間の来日プログラムの成功は望めないだろう。本来短プロは学部生を対象としたプログラムなので、専門よりも一般教養的な性格での授業を

提供する意向であったが、実際に学生に直接会って聞いてみると、その多くが日本語と日本の特殊性を強調して紹介する、いわゆる「日本事情」といった類の授業以外は、専門科目について勉強したいといった声が学生側から多く聞かれた。

3.3. プログラムに関する虚偽情報の問題

SSWAN プログラムの名前の一部でもあるインターンシップ(英語では実質 work experience にあたる)科目が 1 つも提供されていないというのは、明らかに偽りである。もちろん規則として、名前が挙がっているが、実質開講ゼロなので、早急に解決しなければならない。ドイツ人学生の要望にもあったように、学生自身がどこかでアルバイトを見つけてきて、ある一定時間以上をそこで働けば、証明書の提出で単位認定を行うというのは日本ではある意味で画期的である。大学側が授業科目として提供できずにただ名前だけが挙がっているのであれば、学生が持ち込んだこの方法をぜひ検討すべきである。もちろんアルバイトであればなんでも良いというわけではないだろうが、日本を本当に体験するという意味では非常におもしろいものになるろう。

3.4. 日本語の授業選択の問題

基本的には学生の全員が日本語の授業を受講することを希望している。ただその中で、集中的に授業を受け1年の間で少しでも日本語をマスターしたいと考えているのか、それとも日本語という言葉に少し触れ、片言でコミュニケーションさえできればよいのかは、学生の個人の問題なので、今後も必修科目に設定する必要はないと思われる。集中的に授業を受けてきた学生でも、実際はそうしないと英語で受講できる専門科目が少ないために遊んでいる時間が多くなるだけだからといった部局側の思惑があるようにも見受けられた。確かに日本語を集中して学習するコースでは午前中はすべて日本語学習になるために、のんびり遊んでいるということはなくなるだろうが、元来このコースは大学院入学前日本語等研修コースとして設定されており、必ず受講できるという物ではない。あくまで大学院入学前日本語等研修コースに入ってくる学生の数が、定員を大幅に割り込んでいる(割り込みそうな)ときにだけ短プロ学生でも受講できるチャンスがあるという、短プロ学生にとってはきわめて不安定なものである。

3.5. 授業負担過多の問題

短プロ自体の修了要件は1年間で、短プロ基幹科目3分野の中から各最低2単位取得(合計最低6単位)、プラスその他の科目から14単位(総計20単位)の取得であり、一般学部生が1年間に平均して取得する単位数が30単位前後なので、比較的簡単に修了できるように設定している。しかしながら、留学生センターが開講する大学院入学前日本語等研修コース(以後予備教育)という日本語の短期集中コースに籍を置くと、少なくとも半年間は午前中の時間のすべてと、ほぼ毎日午後の最初の1コマを日本語のクラスに出席することが求められるので、実質半年で上記の20単位を取得しなければならなくなる。これは学生にとっては少々過負担となる。しかし、本コースはそもそも日本語学習を積極的に進めることを目的としていないので、予備教育に参加する短プロ学生にとってはきついかもかもしれないが、それをすべての短プロ学生に当てはめることはできない。

3.6. 英語力不足の問題

センター提供の科目には「外から見た日本」という外国人教員が担当する授業があり、その中で日本人学生と一緒に日本について話すという試みを実施している。その科目では、日本について日本人学生と

議論するといったレベルのものを望んでいたが、受講した日本人学生のほうにそれだけの英語力がないので、そこまでには至らなかったようである。また、韓国の学生の場合には英語でのプログラムであるにもかかわらず英語力不足のために、当初から日本語でのやり取りが多く見られた。大学によっては TOEFL 等のスコアの提出を来日前に要求している。たしかに短プロは英語による授業を提供するというものになっているが、アジア圏からの留学希望者が圧倒的に多い現状を踏まえると、むしろ、プログラム全体を見直して、短プロ科目を設定しなおし、「A という科目は英語で、B という科目は日本語で」といった柔軟性を持たせることのほうが大切だろう。日本語でという場合には、教える側に簡単な日本語で専門知識についてしゃべるという技術が必要になってくる。これについては留学生センターの日本語担当教員と専門科目の教員が手を組んで留学生でも理解できる日本語による専門の授業を作っていくための授業研究プロジェクトを立ち上げたいと思っている。

3. 7. 学内施設についてのオリエンテーションの問題

学内諸施設についてのオリエンテーションを短プロ学生向けに実施することは、現在のセンターのスタッフでは残念ながら手が足りない。ただ学内のどこに何があるといった情報は、学生向け学内地図を日英併記版で作成しておけば基本的には事足りると思われる。どの建物のどの教室がなんという名前かについては、できるなら統一された案内板を、それぞれの建物の入り口に日英併記で設置してもらいたい。また、それぞれの部局の HP にも日本語と英語で建物内の見取り図を掲載しておいていただけると、それぞれの部局にはたらきかける必要がある。

4. 短プロに対する部局の対応について

学生に対する対応と、短プロに対する理解と協力という観点に分けて整理する。

4. 1. 学生に対して

実際に学生が来日している工学部・法学部とも、学生のケアを担当している人間が部局内ではっきりしている。それゆえ問題があればその人間にコンタクトを取ることですぐに解消されていた。ところが肝心の留学生センターには、もともと日本語予備教育担当の私が兼任担当となっており、いわば片手間に学生の相手をするような格好になってしまっている。これでは学生を呼んでおきながら満足な対応ができない。せめて留学生センターには短プロを専門に担当する人間が、近い将来教員サイドと事務サイドの双方に配置されることを強く望む。短プロが大学全体の合意の下にスタートしたのであれば、大学全体で全面的に人的(同時に金銭的)措置を直ちに取るべきであり、これができないのであれば、このままこのプログラムを存続させる必要性自体が疑われかねない。

4. 2. 理解と協力

どの部局も英語で授業をするとなるとしり込みをしてしまう教員が多く、口では短プロを進めようといいつながら、フットワークは重い。もちろん「進んで協力しましょう/英語でも授業をやりましょう」といった奇妙な先生方も少ないながら存在はするが、おおむねの実情は、実際に学生が来そうな部局からかろうじて一そろいの授業が供出された感がある。下手な英語で留学生の前で授業などすれば物笑いになると思って、プライドが許さないからだろうか？それとも授業内容に自身がなく、高校を出たばかりの言葉は悪いが馬鹿でシャイな日本人学生なら何とかごまかせるが、何かと質問をしてくる留学生に自分の綻びを広げられ

るのを最初から避けているのだろうか？世はコラボレーション⁵時代である。3. 6. でも述べたが、留学生でも分かるレベルの簡単な日本語で専門について授業を行ってもらえるように、本気でコラボレーションを考える必要があると思われる。

5. まとめ

短プロは、今のところ外から見たときには一見興味のあるプログラムに見えるようである。しかし、来日して受講の登録をしたり、実際に授業のために教室に行くと、いろいろと問題が多いのが実情である。ひとえにこれは実際に受講する学生に立ったプログラム開発がなされていない結果生じる問題であり、他大学に追随する形で何とかスタートさせただけのものであるからに他ならない。短期留学という形で新潟大学に来て学ぶ学生を増やし、さらにはその学生にいずれはマスターやドクターの学生として学位取得や研究目的で再来日してもらおうというのであれば、またそれによって新潟大学全体の国際化や、ある意味でのレベルアップを図ろうというのであれば、全学的に本腰を入れてこのプログラムの整理に取り掛かる必要がある。奨学金との絡みもあって単純にことは運ばないだろうが、たとえば今までは人文学部と教育人間科学部が実施していた1年間の留学プログラムである、「日本語日本文化研修生(通称日研生)」も今年からは留学生センターを母体にして実施することになったので、いっそのこと全て短プロとして一つのプログラムにまとめてしまうわけには行かないかとも思っている。

以上、短プロを実際にスタートして学生と接している中で感じたこと等を思いつくままにまとめてみた。よって、少々取り留めのないものになっている点についてはご容赦願いたい。

⁵ 異業種が手を組んで事業(目標)の達成のために、いっしょに働くこと。ビジネスの世界では、いまや世界的常識となりつつある。